

国崎クリーンセンター利用者十万人達成、エドヒガン群生林整備記念事業
記念講演会『北摂の原風景』

「万葉集に描かれた北摂」

講師 服部保・坂本信幸

二〇一五年三月二十二日（日） 国崎クリーンセンターゆめほたる



照葉樹林(宮崎県綾町)

照葉樹林

- 常緑広葉樹林の一種
- 光沢のある葉(ツバキ, クス, カシ, シイ)
- 樹高20~25m
- 着生植物, 腐生植物, 寄生植物
- 東アジア, 熱帯山岳, カナリア諸島, チリ, ニュージーランド, フロリダ半島
- 東北地方沿岸部以南の低山・低地
- タブ型, シイ型, カシ型
- 神社, 寺院(密教系)に孤立林
- 宮崎県綾町, 鹿児島県栗野岳, 対馬竜良山, 屋久島, 西表島等に大規模残存林

宮、この近くだと豊能町の吉川八幡神社とか、それから宝塚の神社、川西の多太神社、そういう森が照葉樹林です。

照葉樹林と言うと難しいような感じがしますが、実は今、高校の教科書では常緑広葉樹林とは言わないで照葉樹林と言う言葉を使っています。常緑広葉樹の一種のツバキの葉は、光を当てるとテカテカ光りますね。それで照葉と言う名前が付いているのですが、原生状態の照葉樹林と言うのは、神社とかお寺に残っています。

この写真は宮崎県綾町の、非常に発達した照葉樹林です。樹高が約30メートル、胸高の直径が1メートル60センチ、そういう大径木から構成される原生林が、かつては北摂の山間部にも広がっていました。

今は、ここ国崎クリーンセンターから周りを見ても落葉樹の里山が広がっていますが、昔は葉っぱを落とさない常緑の森が広がっ



里山に対応するのは、奥山。奥山と言うのは、人間の手の入らない原生林が残っているところです。里山ができたのは、今から二〇〇〇年から三〇〇〇年ぐらい前だと考えられています。まず照葉原生林を破壊して、今我々の周りのある落葉樹型の里山、この落葉樹型の里山にいきなりなるわけではなく、いろんな林を経ています。

まず、照葉原生林を破壊して、最初の里山と言うのは常緑型の里山、

ていたわけです。妙見山の山頂にはブナ林が残っていますが、夏緑樹林とか照葉樹林と言う原生状態の森を破壊して、人間が里山林を作っていた。里山林、要は薪炭林あるいは雑木林、そういう森を作って来たわけです。

里山を作ったのは、だいたい弥生時代。縄文時代の人間も煮炊きはしたので燃料は使っていたのですが、人口密度も低いし、里山を作らなくても生活できたわけです。人口も増えてきた弥生時代以降になると、定住生活を行うようになり、燃料を供給する山が必要になった。その燃料を供給する山を里山林と言いました。ただ、里山林と言う言葉が使われ出したのはごく最近で、万葉の時代も江戸時代もほとんど使われていません。里山と言う言葉は使わず、単なる山。だから桃太郎の話で「おじいさんは山へ柴刈りに」の「山」と言うのが里山のことです。昔は周りが全部里山だったので、わざわざ里も付けなかったのです。

国崎クリーンセンター利用者 10 万人達成、エドヒガン群生林整備記念事業
記念講演会 『北摂の原風景』

2015年3月22日(日) 国崎クリーンセンターゆめほたる

講演 万葉集に描かれた北摂



服部 保

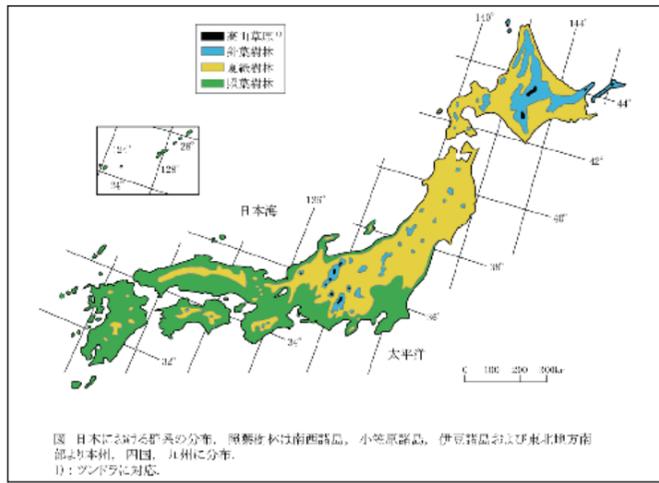
川西市教育委員会委員長
兵庫県立大学名誉教授
能勢電鉄株式会社顧問

○司会
— 本日は、最初に服部先生から、次に坂本先生のお話をいただいた後、お二方の対談に移らせていただきます。それでは、服部先生お願いいたします。

服部保氏講演
古代の日本の植生

早速「万葉集に描かれた北摂」についてお話しします。万葉集に描かれた時代は人口も増え、水田耕作あるいは里山の開発などで自然が変えられていきます。では、人間が手を加える以前の植生はどうかと言うところから始めたいと思います。

人の手が加わる以前の植生と言うのは四つしかなくて、照葉樹林、夏緑樹林、亜高山針葉樹林、それから高山草原です。その図を示したものがこちらです(図①)。ここが六甲山と妙見山。山頂を除いて周辺一帯は全て照葉樹林と言う森に覆われていました。照葉樹林はどんな森かと言うと、奈良の春日野とか伊勢神



図① 日本の原植生図

ナデシコ、キキョウ、フジバカマと言うのを全部読んで、歌が出てきます。あとハギとススキ、ハギとオミナエシとか、こう言う植物を詠んでいます。実は、これは全部「ススキクラス」と言う植物社会学上で言う「草原性植物」の種です。だから全部正しい。万葉集の植物のいろいろな組み合わせは全て正しい。妥当です。山上憶良なんてすごいです。秋の七草をびたと、もともとあつた植物をきちんと詠んでいます。だから、日本で生物多様性を最初に意識したのは山上憶良ではないかと私は言っています。

万葉植物と地形単位の対応

次は万葉植物の地形単位です。例えば、田んぼにススキが生えてるという歌があつたら変です。では、そう言う地形単位と植物の関係を調べていきました。そうすると、田

万葉植物と地形単位との対応

田 : イネ, イヌビエ, コナギ, セリ
 野 : オミナエシ, チガヤ, ススキ, ハギ, カワラナデシコ, ハンノキ
 山 : ウツギ, ツツジ, サクラ, アカマツ
 奥山 : ツバキ, スギ, ヒノキ, サカキ, シキミ
 社 : モミ, スギ, ツガ
 河原 : アカメガシワ, ヒルガオ
 川 : ネコヤナギ, マコモ
 河口 : ヨシ, カサスゲ類
 浜 : クロマツ, ハマヒルガオ

調べていきました。そうすると、田にイネが出てくるわけです。これは当たり前。イヌビエは、水田雑草で絶対水田には出てきます。それもきちんと詠んでいます。コナギ、セリ、これも水田の雑草です。ちゃんと田んぼとこう言うものがセットになるわけです。野にオミナエシ、チガヤ、ススキ、ハギ、これもぴったり合っています。野の中で少し湿性の立地になるとハンノキが出てきます。これも非常に妥当。山になるとウツギ、ツツジ、サクラ、これも妥当です。

林ですね、照葉樹林とクロマツ林とか、いろんなタイプが詠まれています。栽培植物とか栽培植物が多い。栽培植物って言うのは接するチャンスが多いので当然多くなるわけです。

植物が群生している状態

それ以外に、実は万葉植物の研究では、群落として出てきて植物個体の名前が入っていない場合は省いてしまう。ところが、植物の名前は入っていないけれど、群落単位を表すような言葉が万葉集に

万葉名	相親	群落名	植生単位	首数
森、社、神社(もり)	照葉樹林	—	ヤブツバキクラス	26
橋の林	照葉樹林	タチバナ人工林	—	1
椽原(はりはら)	豆緑林	ハンノキ林	ハンノキクラス	9
槻群(つきむら)	豆緑林	ケヤキ林	エノキムクノキ群団	1
柞原(ははそはら)	豆緑里山林	コナラ林	コナラ・イヌシデ群団	1
松原	針葉樹林	クロマツ林	—	15
杉群(すぎむら)	針葉樹林	スギ林	—	1
杉原	針葉樹林	スギ林	—	1
杉の野	針葉樹林	スギ林	—	1
椴原の山	針葉樹林	ヒノキ林	—	1
椴原	針葉樹林	ヒノキ林	—	5
椴山	針葉樹林	ヒノキ林	—	1
杣山(そまやま)	針葉樹林	スギ・ヒノキ林	—	1
杣(そま)	針葉樹林	スギ・ヒノキ林	—	1

使用されています。それを調べてみました。例えば、社、神社と書いて「もり」と読む、この社には植物名が入っていないから、万葉の植物としては無視されています。ところがこの社、神社も「もり」と読みますが、これを詠んでる歌は二十六首もあります。

照葉樹林を意識している歌が二十六もある。万葉植物だけで分析しても出てこないものです。あと松原とか杉原とか、杣山とか。杣などの単位を表す言葉が結構出てきます。

紅葉の状態を詠った歌

それから山の紅葉、黄葉、落葉に関する用語が出てきます。紅葉の言葉は植物の名前が入っていないので、植物の分析では省かれてしまいま

山は、これは里山のことです。それから奥山、人の手が入らない山にツバキ、先ほど言いましたようにツバキは照葉樹林の構成種ですから、暗いところに出てくるわけです。人の手の入らない。そう言うところにツバキとかスギとか、ヒノキ、サカキ、シキミが出てくる。これもすごい妥当。社、これは「もり」とも読むのですが、モミとかスギ、ツガ、これも妥当。それから河原にアカメガシワ、ヒルガオなんかが出てくる。これも非常に妥当。河口にヨシとかカサスゲの仲間が出てくるとか、海岸の浜にクロマツとかハマヒルガオが出てくる、これも極めて妥当と言うことになると、万葉植物と地形単位の対応は、非常に妥当と言うことになりそうです。

万葉植物が生育する植物群落

次は、万葉の植物を群落単位でまとめています。万葉植物は個々の植物で詠まれますが、群落の中に生育していますから、それを今度群落にまとめました。

どんな群落の構成種か言うと、ススキクラスのススキ草原を詠んでいる歌が圧倒的に多い。

栽培植物はもつと多くてもよき。そうなのですが、枕詞に使って多く見えるのですが、栽培植物、畑、里山、ヨシの草原、ノイバラクラス、ヤブツバキ、照葉樹

植生単位別の首数と植物種数(3)	首数	植物種数
ススキクラス(河原草原)	237	(17)
栽培植物(畑)	358	(37)
栽培植物(田)	20	(9)
コナラ・イヌシデ群団(夏緑里山林)	105	(13)
ヨシクラス(低草草原)	106	(9)
ノイバラクラス(林縁植物群落、先駆性豆緑林)	79	(15)
ヤブツバキクラス(照葉樹林)	86	(18)
クロマツ林(海岸林)	44	(1)
栽培植物(田)	51	(2)
アカマツ群団(針葉里山林)	43	(6)
フナササオダ(夏緑自然林)	4	(3)
スギ・ヒノキ林	41	(3)
マダケ・ハチクシ(竹林)	16	(1)
ハンノキクラス(沼沢林)	17	(2)
エノキムクノキ群団(エノキ林)	9	(3)
シロザクラス(雑草群落)	11	(2)
ヨモギクラス(雑草群落)	4	(3)
タウコギクラス(流水辺雑草群落)	6	(2)
イネクラス(水田雑草群落)	6	(3)
セリムクノキクラス(河原・水辺植物群落)	5	(4)
オミナエシクラス(河原)	4	(1)
ハマゴウクラス(砂浜低木群落)、ハマボクフクラス(砂丘草原)	2	(2)
総計	1254	(139)



里山林の紅葉(京都府木津市)

す。ところがこれはものすごく大きくて、「もみぢする」と言うことは里山が落葉樹林化していると言うことです。「色づけにけり」「山は色づけにけり」なんて言うのは山の紅葉を詠っている。これはモミジの紅葉ではなくて、里山の紅葉、落葉樹の紅葉する状況を詠んでると言うことになります。

植物の状態を詠んだ歌

まとめますと、「もり」は照葉樹林を表しています。ヤブツバキクラスと言う植生単位で、照葉樹林が二十六首。黄葉は落葉樹型の里山で、六十六首もあります。これらを加えていくと、まず植物だけで区分すると、一番よく詠んでいるのはススキ草原、次に庭園、それから夏緑里山、古今とか新古今になると、自然と言っても庭の自然を詠んでいる歌が結構多くて、万葉自体はそのもの自然を詠んでいるものが多いと言いますが、万葉集の時代でも庭園の自然

歌番号	用語	対象地	地名	紅葉の状況	景観
16	黄葉	山	奈良県?	黄葉をば取りて	山の四季の変化、山の紅葉
135	黄葉	山	島根県	黄葉の散りの乱ひに	山の紅葉から落葉
137	黄葉	山	島根県	落つる黄葉	落葉
139	黄葉	山	奈良県	黄葉を聞ひ給はまし	山の紅葉
208	黄葉	山	—	黄葉を聞ひ	山の紅葉
543	黄葉	山	和歌山県	黄葉の散り飛び見つつ	山の紅葉から落葉
971	色づく	山	奈良県	霜雲に色づく時に	山の紅葉
1053	黄葉	山	奈良県	宮につらふ黄葉散りつつ	山の紅葉から落葉
1094	黄葉	山	奈良県	黄葉しにけり	山の紅葉
1306	黄葉	山	—	山の黄葉の下の花	山の紅葉
1409	黄葉	山	—	秋山の黄葉おはれ	山の紅葉
1513	黄葉	山	奈良県	春日山黄葉にけらし	山の紅葉
1516	もみつ木	山	—	秋山にもみつ木の葉	山の紅葉
1517	黄葉	山	奈良県	山照らす秋の黄葉	山の紅葉
1536	黄葉	野	三重県	黄葉早続け	野の紅葉
1553	色づくにけり	山	奈良県	木末あまねく色づくにけり	山の紅葉
1554	黄葉	山	奈良県	黄葉は今日の時雨に	山の紅葉から落葉
1568	色づくにけり	山	奈良県	山は色づくにけり	山の紅葉

山等の紅葉落葉に関する用語

万葉時代の植生

- ススキ・チガヤ草原
- 夏緑里山林
- 水田
- クロマツ林
- 照葉樹林(神社・奥山)

近畿地方の暖温帯(照葉樹林帯)における山(里山)の植生変遷。夏緑里山林の成立は万葉時代



植生単位別首数の順位

	植物で区分	植栽	相観を追加
1	ススキ草原	庭園	庭園
2	庭園	ススキ草原	ススキ草原
3	夏緑里山	ヨシ草原	夏緑里山
4	ヨシ草原	夏緑里山	照葉樹林
5	照葉樹林	照葉樹林	ヨシ草原

もり, そま, 黄葉の首数

もり	ヤブツバキクラス	26
そま	スギ・ヒノキ林	3
黄葉	コナライヌシデ群団	66

ツタケに変わっているからです。と言うことは、この時代にアカマツ林になった。江戸時代ははげ山。これは絵図にも残っていますから分かります。明治時代に針葉里山になって、一度里山になります。が、今は里山の放置林になっています。このように植生が変遷してきたことが分かりました。

万葉時代の植生と言うとススキ・チガヤ草原も広がっています。これらは今もあります。それから落葉樹型の里山があつて、水田があつて、なぜか海岸にクロマツ林があります。クロマツ林は全部人工的に植えられたものだと思っていれば、当時の自然は自然のものなのでしょう。一度津波か何かで破壊された後に再生してきたようです。クロマツ林は自然の状態では維持できません。絶対別の林に変わってしまいます。ですので、江戸時代以降のクロマツ林は全て人工林です。けれども、この室町時代のクロマツ林は、一度破

を詠んでいます。大伴家持の歌でも、山の自然を詠っているものと思つたらそうではなくて、庭の自然を詠んだ歌が結構あります。

落葉樹型の里山はヨシの草原、照葉樹林と言う歌。この中で実はススキ草原の植物、例えば、ナデシコなんかは庭に植えたりしています。庭に植えたと言うのもう一度調べ直すとやはり庭園が一番多くなり、ススキ草原が二番と言うことになります。

照葉樹林とか、山が紅葉しているのを入れると、やはり庭園が一番ですが、ススキ草原が二番、それから夏緑樹林の里山は意外に三番、照葉樹林が四番目になっています。それからヨシの草原と言う順番になりました。

貴族の家の庭園は広いです。ね。その自然を詠んでいるのが一番。それ以外にやはり草原。開放的な景観が非常に好きです。それから落葉樹型の里山も好きです。「もり」も詠んでいます。照葉樹

林も大事にしていないわけではない。自然の林も大事にしてないわけではなくて四番目。それから、あとヨシの草原と言うことが分かりました。

山の植生の変遷

本日のお話をまとめますと、縄文時代に照葉原生林があつて、水田耕作になるとたんに照葉型の里山になります。弥生時代は照葉型の里山だったと推測します。けれども、弥生時代以降山の利用頻度が上がっていくと照葉型では耐えられなくなつて、万葉時代に落葉樹型の里山になった。だから、万葉時代の植生景観は意外と今我々が見ているその里山、この景観に近かつたのではないかと言うような感じがします。

万葉時代を過ぎると今度は針葉樹型。室町時代にアカマツ型になったのが何故分かるかと言うと、貴族の日記に書かれた贈物の品が、室町時代にヒラタケからマ

照葉樹林・奥山(宮崎県綾町)



照葉樹林・神社(兵庫県太山寺)



クロマツ林(鹿児島県吹上浜)



ススキ草原(兵庫県砥峰高原)



水田(宮崎県)



夏緑里山林(兵庫県三田市)



講演 万葉集に描かれた北摂



坂本 信幸
高岡市立万葉歴史館館長
奈良女子大学名誉教授

県別万葉歌所出地名数

近畿圏

・奈良県(736) ・大阪府(182)
・兵庫県(124) ・滋賀県(116)
・和歌山県(103) ・京都府(100)

近畿以外

・富山県(95) ・福岡県(69)
・静岡県(57) ・茨城県(48)
・群馬県(36) ・神奈川県(33)
・千葉県(30)等々

北摂の国名

資料にも上げておきま
たが(資料一ページ)、w
e b l i o 辞書で見ると
北摂には二つの意味があり
ます。一つは令制国の、律
令で定められた国の摂津の
国北部に由来する地域名称

第三位の兵庫県はというと、瀬戸内海行路の通過場所です。そして、
明石が畿内と畿外のちょうど境にあります。明石の橿淵を越えると畿外
になります。そういった境
のところを歌を詠わなけれ
ばならないこともあって、
兵庫県での歌が多くなつて
いるわけです。

万葉歌所出地名

本日のテーマ「万葉集に描かれた北摂」ですが、まず犬養孝博士がお
調べになった県別万葉歌所出地名数を見てください(資料一ページ)。
兵庫県は第三位となっています。奈良県が多いのは当たり前なこと
ですね、都が置かれていたから。そして大阪が多い。これも分かりま
す。滋賀県は大津宮が置かれていました。そして和歌山は、天皇の行幸
地でした。天皇が即位なさいますと、吉野に、そして紀州に旅行する
というのが、天皇が行うべき行幸としてありました。その行幸の際に歌が
詠われたのです。

壊された後、自然に復元したのもあったのではないかという感じがし
ます。

それとやはり照葉樹林、元々あった「もり」も大事にしています。神
社の杜とか奥山に残っています。万葉時代の植生景観はざっとこんな感
じだったのかなと思います。ススキ草原なんかこの時代に既にあった
と言うことです。これは落葉樹型の里山と言うことになります。水田が
あって、海岸にクロマツ林もあって。今あるクロマツ林は植林なんです
が、万葉時代のクロマツ林は人工林ではなくて、一遍破壊された後、ク
ロマツが入ってきた生育途中の植生と言うことになります。それから、
神社とかお寺の裏に既に森があったと。それから人の手の入らない奥山
にもこう言う森があったと言うことになります。残念ながら兵庫県の中
から奥山はほとんど消えてるのですが、この時代はまだこう言う奥山に
照葉樹林が残っていたと言う気がしています。

○司会

— 服部先生ありがとうございます。それでは、続きまして坂本先生か
らお話を頂戴したいと思います。よろしくお願いいたします。



う文字を加えたのです。

そういう地名は他にもあります。例えば、イヅミノクニの「和泉」も、もとは「泉」一字でした。また、キノクニ。これは材木、良材が取れるから「木」の国。今日においても和歌山県は良材を産出する県で、昔から続いているわけです。ところが二文字にしなくてはならなくなつて、どうしたかというところ、関西弁は母音を少し伸ばす癖があります。目をメエとか、歯をハアとか。だから、「木」を「紀(キ)伊(イ)」としました。その他に、「斐伊川」と言う川が島根県にあります。これは「斐川」の「斐」にイをつけて斐伊川になる。こうしたわけです。ところが、「摂津」のほうはツノクニと言っていたのを、「摂」という文字を加えたわけです。加えるのは「大和」と同じようなものです。ヤマトは元は「和」と書いていた。それに「大」をくっつけて「大和」と書いてヤマト。つまり、「和」だけでヤマトだったのに、「大」をつけた。日本の中心ですからね。「摂津」

ということ、一般的に大阪府の北部、兵庫県の東南部を指します。「摂津の国」、今は摂津の国と言いますが、万葉の頃はツノクニと言っていました。「摂津」と書いて「つ」と読みます。それは何故かというところ、和銅六年に都が奈良に移り、「好字二字令」というのが出て、国名を二文字の好字に変えるようにということになり、元来「津」(港)があるから、「津の国」と言っていたところに「摂」とい

の「摂」は治めるとか整えるというような意味を持った言葉です。つまり、「津」は港を治めるところであるということで、「摂」をつけて誉めた。つまり、「摂津の国」というのは港を治める国であるということになるわけです。

その中で「北摂」は、摂津の国の北部を意味するということで、この場合は北摂の現在の兵庫県東南部、とりわけ川辺郡北部や有馬郡の旧群に当たる北部地域を含むことになるという理由で、三田市が北摂を冠称のように使っていることになりました。

北摂の万葉歌

先ほど服部先生もおっしゃっていましたように、万葉集に北摂を詠んだ歌の数は多くありません。しかも、「摂津の国」ですから、海辺の歌がやはり多いことになります。けれども、宮城県の大崎郡の「山は海の友達だ」ということで、牡蠣の養殖のために植林をしましたね。山の養分が海に流れ込んで良い牡蠣ができる。つまり、海と川は一体なんですね。ことに、古代は水運をよく利用しましたから、水、川は一つの道でした。例えば、万葉集の一番最初の歌の作者である雄略天皇の宮は「泊瀬朝倉宮」と言いました。長谷寺があるところ。泊瀬というのは、船が停泊する瀬、泊つる瀬であるから泊瀬と言ったわけです。そこに都が置かれました。大和川を遡って行って、日本の政治・文化の中心地に繋がっていたわけです。多くの人たちが、例えば川西にしても川を遡って、上流に定着していくわけです。

ですから、猪名川とか武庫川という川が北摂にとつては重要になります。その中でまず一つ歌を見てみます。プリントに書いておきました(資料①)。

昔、壮士有り。新たに婚礼を成す。未だ幾時も経ねば、忽ちに駆使となりて、遠き境に遣はされぬ。公事は限り有り、会ふ期は日無し。ここに娘子、感懐懐、疾ひに沈み臥しぬ。累年の後に、壮士還り来り覆命すること既に了りぬ。すなはち語り相視る。しかるに娘子の姿容の、疲羸せること甚だ異にして、言語哽咽す。ここに壮士哀しび嘆きて涙を流し、歌を裁りて口に号ぶ。

その歌一首

かくのみにありけるものを猪名川の奥を深めて我が思へりける (16・三八〇四)

娘子、臥しつづ夫君の歌を聞き、枕より頭を上げ、声に応へて和ふる歌一首

ぬばたまの黒髪濡れて沫雪の降るにや来ますここだ恋ふれば(16・三八〇五)

今案ふるに、この歌は、その夫使はれて既に累載を経ぬ。而して還る時に当たりて雪降る冬なり。斯によりて、娘子この沫雪の句を作るか。

昔ある男がいた。新たに結婚をして、まだ余り経たないうちに、駆使となつて遠いところに派遣された。公の仕事は規定があるから妻と会う時がない。そこで、その妻の娘子は大変悲しんで病気になるまで伏せてしまった。何年か経った後に、男は帰ってきて命ぜられた仕事の報告を終えた。すぐに妻のところに行き逢った。ところが、娘子の容姿は夫と逢えない嘆きでひどくやつれ果てて、ことばは嗚咽にむせぶばかりであった。そこで、男は悲嘆して涙を流して歌を作つて口ずさんだ。その歌として、「かくのみに ありけるものを 猪名川の 奥を深めて 我が思へりける」――妻が病み伏せてしまうということになるだけだったのに、猪名川の奥が深いように奥深く私はおまえのことを思っていたことだ、と詠ったというわけです。

この「猪名川の奥」というのは猪名川の水の深さ、「奥」オクと「沖」オクとは同源の語ですから、深い意と、遠い意と両方ありますけれども、おそらくはその猪名川の深いように深く妻を思っている。そして、猪名

川の川の長さ、山の奥のほうまで猪名川は流れ込んでいますが、「奥を深めて」つまり、ずっと行く末まで、遠い将来まであなたのことを私は思っていたんだと嘆いた。すると、その「娘子」は伏せてたままで夫の歌を聞いて、枕から頭をもち上げて、夫の声にこぼれて歌った歌が、「ぬばたまの 黒髪濡れて 沫雪の 降るにや来ます ここだ恋ふれば」――「ぬばたま」は「黒」や「黒髪」「夜」にかかる枕詞です。黒髪が濡れて、沫雪が降っているのにいらつしやつたのでしょうか。こんなに恋い慕っているの、という歌です。

この歌がどこで作られたかはよく分かりませんが、もし都で作られたならば、都の人が猪名川の長さなどを知識としてよく知っていたということになります。

高市連黒人の歌

次は(資料②) 高市連黒人という、叙景歌の祖といわれる歌人です。「我妹子に 猪名野は見せつ 名次山 角の松原 いつかささむ」――私の妻に猪名野はもう見せた。名次山や角の松原をいつ示そうか、と詠っています。名次山とか角の松原については説明を書いておきました。わざわざ見せたと言っていることは、都にいる人たちに猪名川を見たいという思いがあるから、連れて行って見せるわけです。当時は、女性はそのほどのことがない限り旅行はしないのです。けれども見せたい。そして、名次山や角の松原、といった所をいつ見せようか、というわけです。それから、名次山や角の松原といった所も人に見せたいような景観だったということです。先ほど服部先生がおっしゃっていたように、万葉の時代には既にくらか手が加わつて一つの景観を表していた。猪名野がよい景観を保持していたということがよく分かるわけです。

そうして「いざ子ども 大和へ早く 白菅の 真野の榛原 手折りて行かむ」―さあ、おまえたち大和へ早く帰ろう。白菅の生えている真野の榛原で、榛をみやげに手折って帰ろう。真野はだいたい南の方になりませぬ。歌が多くないので、北摂の植物は、二つぐらいしか出てこない。菅とハンノキです。ハンノキというのは、染料に使う植物です。榛染めが行われていました。ハンノキの実を焼いて染料に使うのです。その場合、媒染剤を用いて染めるわけです。ところが万葉の歌には他に、「引馬野に にはふ榛原 入り乱れ 衣にほはせ 旅のしるしに」―引馬野に一面に生えているハンノキの原っぱにみんなで行って、衣を染めよう。旅の記念として。「引馬野」は愛知県の地名ですが、「旅の印」として、旅に行った土産として引馬野のハンノキが生えている原に行つて衣を染めようというのは摺り染めのような感じがしますね。原始的な染め方。榛原に身を置くことをいったかも知れない。いずれにせよ染料になるハンノキというのは人々によく知られていて、その群生する原を見たいという思いがある。染色材料として植えていた可能性があります。「白菅の 真野の榛原」と、「白菅」という植物も歌われていますね。

摂津で詠まれた歌

摂津で作られた歌として、「しなが鳥 猪名野を来れば 有間山 夕霧立ちぬ 宿りはなくて」(資料③)―(しなが鳥)猪名野をやつて来ると、有間山には夕霧が立ち込めていた。今夜泊まる宿はないままに。「しなが鳥」というのは地名「猪名野」の「ぬ」にかかる枕詞とされています。枕詞は意味がよく分からないものが多いです。しなが鳥というのは、カイツブリです。雌雄の仲が良くいつも連れだつている、率

また、こんな歌があります(資料⑭)。

「大君の 御笠に縫へる 有間菅 ありつつ見れど 事なき我妹」

―天皇の御笠に縫っている有間の菅、その有間菅のアリという菅の名のようにあり続けてずっと見えても難点がない、私の愛しい妻だ。という妻を賞めた歌ですが、そこに「有間菅」という植物が歌われていて、「ありつつ」ということばを起す序詞になっています。ということば、よほど有間の菅が知られていたんですね。大君の笠に使うわけですから、大変良質の菅が有馬のあたりで産出されていた。当然これは笠にする材料として良質の菅を栽培していたということです。

「人皆の 笠に縫ふといふ 有間菅 ありて後にも 逢はむとそ思ふ」―人皆が笠に縫うという有間菅、その有間菅の名アリという名のように今は逢えなくても、あり長らえて(生き長らえて)、後にはあなたに逢おうと思います、という恋の歌です。

「摂津の国」の有馬郡一体は、菅笠の材料となる菅の産地であった。菅笠というのがよく踊りの笠として使われているのを見ることが出来ます。踊りというと、「兵庫歴史ステーション」のサイトで、「三田本庄百石踊り」というのを見ました(資料四ページ)。こういった踊りに一文字笠、菅笠が使われている。江戸の頃まで有間の菅



大君の 御笠に縫へる 有間菅
ありつつ見れど 事なき我妹(口・二七五七)
大君の御笠に縫う有間菅、その名のように、あり続けつつ見ても難点のない私の妹だ。
人皆の 笠に縫ふといふ 有間菅
ありて後にも 逢はむとそ思ふ(口・二七五七)
みんなが笠に縫うという有間菅、その名のように、あり長らえて、後になっても逢おうと思ふ。
*「有間菅」―有馬の付近で産した菅。同菅の「あり」を起す序。摂津国有間郡一帯は菅笠の材料と成る菅の産地であった。

ているの「ぬ」から「猪名野」かかるのだろうといわれています。人家が少ない土地の様子がうかがわれます。

次は武庫川の歌です(資料⑥)。
「武庫川の 水脈を早みと 赤駒の 足掻く激ちに 濡れにけるかも」―武庫川の水の流れが早いものだから、乗っている赤駒が足を掻く、その水しぶきで濡れてしまった。西方への旅を続けるには、武庫川という流れの速い川を渡河しなくてはいけないという旅の様子が詠われています。

次は有馬山の歌です(資料⑩)。
天平七年に、大伴家持の伯母さんにあたる大伴坂上郎女が作つたうたです。大伴家に寄宿していた新羅の国から来た尼さんが亡くなった。ところが、本来その葬儀を執り行うべき大伴家の中心人物の石川命婦が有間に療養に行つて留守をしていた。そこで、坂上郎女が万端を仕切つて葬儀のことは行わなくていけなかった。そうして葬儀を終えてその報告を有間温泉に行つていた石川命婦にしたわけです。「佐保川を 朝川渡り 春日野を そがひに見つつ あしひきの 山辺をさして 夕闇と隠りましぬれ」―佐保川を朝渡つて、春日野を背後に見ながら、(あしひきの)山辺に向かって夕闇のように隠れてしまった(亡くなってしまった)。と歌いまして、坂上郎女自信は葬儀を終えて、「ただひとりして 白たへの 衣手干さず 嘆きつつ 我が泣く涙 有間山 雲居たなびき 雨に降りきや」―たった一人で、涙に濡れた(白たへの)衣の袖も干さないで私が泣いている涙は、有間山に雲となつてたなびいて、雨になつて降りませんでしたか。このような歌を詠います。ということば、有間山が、都において早くから知られていたということが分かるわけです。そして有間温泉が、湯治場として利用されていたことも分かります。

が伝えられていて、三田のあたりでも、やはり、いい菅が取れていたということが大体想像できます。

私の勤務している高岡市に福岡町という所がありまして、そこは全国の菅笠の九十パーセントのシェアを握っています。平成二十一年に越中福岡の菅笠製作技術として、国の重要無形民俗文化財指定を受けました。菅を植えて、植えた菅を刈つて、生産する。一貫した生産をこの土地で行っているということばで文化財指定を受けたわけです。そういった栽培地や菅笠制作の技術なんかは、かつて有馬にもあったのでしようが、今はなくなっています。残念なことですが、そういった菅のたくさん生えている景観がこのあたりにあったということです。

有間皇子は大変有名ですが、おそらくその父親孝徳天皇が有馬に來ているときに皇子が生まれたから付いた名前です。当時の皇子や皇女の名前の付け方養育した氏族の名が付けられる、―例えば草壁皇子は草壁氏が養育したから草壁皇子と名づけた。また、生まれた時にいた土地の名前が付けられる場合があります。大津皇子は福岡県博多の那の大津で生まれたから大津皇子。有間皇子は有間で生まれたから有間皇子ということです。

有間皇子こと、孝徳天皇の有間温泉行幸については資料に挙げておきました。時間が参りましたので、私の話はこれで終わりにいたします。

○司会

―坂本先生、ありがとうございます。引き続き、服部先生と坂本先生に対談をお願いします。

対談 北摂の原風景 坂本 信幸 × 服部 保



坂本 私は花粉症でして、この中にも花粉症のかたが大分いらつしゃると思しますので、少し先生にお話をお伺いしたいと思います。

服部 奈良時代、花粉症はどんな具合だったのでしょうかね。

坂本 ハンノキの花粉症というのはひどくて。

服部 そうなんですか。

坂本 ヤシヤブシとかハンノキは非常に危ないです。だから、ハンノキの林も結構あつたけれど、花粉症の人がいたかどうかはちょっと分からないです。

坂本 万葉の時代はかなり開発されていたというお話でしたけれども、野原を意味する「野」という言葉に、「大野」と「小野」ということばがあります。私たちが学生の頃は、「大野」はただ単に大きな野、「小野」は小さな野と思っていましたけれど、実はそうではなくて、大野は未開の野、荒れ野、小野は人の手が加わつた野であるという論文が出て、そのように考えられるようになりました。この野の言い方というのはどんな具合だったのでしょうか。

服部 野というのは平坦なところだから、草原が広がっているのが野だと思っていたんですけど、万葉集を見ると樹木の茂っているところでも野になっていますね。

坂本 そうですね。

服部 そうすると、野というのは草原だけではなくて、ハンノキの林なんかがそうですね。あれは樹木だけれど、野ということになっている。それから、先生が言われた人の手が入って草原状態になったような野と、人の手が入っていないで森林がそのまま残つたような野、杉野なんかもそうですね。そういうものがあるのでは。

坂本 はいかと感じます。

奈良ですと、春日野のことを野と言っていて、低いからではないかという感じもあるんですけど、そうではなくて山も含めて野と言っていますね。山上憶良がたくさんの植物を詠んでいるという話でしたが、秋の七草、随分危惧なさっている植物があると。

服部 そうですね。秋の七草は当然七種類あるんですけど、七種類の中でススキとハギとそれからクズ、クズは絶滅どころか、どんどん増えて非常に困っています。だけど、あとの四種類は非常に危ないです。環境省のレッドデータに入っている植物、キキョウなんかはそうですね。フジバカマもそうですね、非常に危ない。オミナエシとナデシコはレッドデータには入ってませんが、非常に少なくなくなっている、そんな状態です。

坂本 確かにフジバカマは最近見ないですね。
服部 フジバカマ自体を御存じないかたが結構いらつしゃるかもしれないですね。見たことがないぞという人ちよつと手を上げてください。実は見ているんですよ、小さい頃に、気付いてないだけで。

坂本 一番危ないのは…。

服部 一番危ないのはヤマトナデシコ。ナデシコというのは絶滅に瀕しているわけではないですけど、非常に減少している。ナデシコが秋の七草に選ばれた理由と、日本の女性の美称に例えられますね。キキョウでもオミナエシでもリンドウでも、きれいな植物はたくさんあるけれど、なぜナデシコなのか、理由は幾つかあります。ナデシコの花は、花びらの先がとても繊細です。

坂本 ですから、ナデシコジャパンが強いのは当たり前やという話になるわけなんです。

服部 大伴家持が大変ナデシコが好きで、多く歌に詠んでいます。子供まで作つた内縁の妻が、亡くなる前にナデシコを植えて、「私が死んだらこの花を見て、私のことを思つてちょうだいね」と言つて亡くなったということをお話しています。大変ナデシコを愛して、内縁の妻のことをナデシコと歌つて偲んでいる。ところが、やがて妻になる大伴坂上大嬢と交際しているときにも、大嬢をナデシコと例えて、恋歌を詠っています。節操がない。

坂本 まあ、ナデシコの強さにそれだけ惹かれるのでしょうか。先生の一番好きな万葉植物って何ですか。

服部 ナデシコも良いですけど。そうですね、花がきれいですのでカタクリと、名前がいいのはやはりムラサキですね。

坂本 ムラサキは大変栽培が難しい。先ほど繊細と染色の話の前川先

生にしていたいただきましたけども、貴重な色ほど位の高い人の色になるわけです。ムラサキは栽培が難しいので貴重、紅花はもっと貴重なんでこういった色は高貴な人の着る衣服の色になっています。ところが、黒とか黄色というのはどんぐりなんかですぐに染めることができるから庶民の着る服、といった具合ですね。ムラサキの栽培は何で難しいんでしょうね。

服部

今から十数年前に、この近くの兵庫県の一庫公園でムラサキが一株見つかったことがあったんです。一株だけ見つかって、その一株しかなかったから取ってこなかったというので、怒って、一株しかないんだったら取ってこいって取りに行かせたんですけれど、シカに食われてなくなっていた。それが兵庫県の最後の株で、兵庫県から絶滅したんです。昔は栽培もして、結構多かったんですが、結局、兵庫県からムラサキは絶滅した。そんな状態です。



にいるときには、カタクリなんか見たことなかったのでしょうね。

服部

そうですね。越中に行つて、小さな花を見て、その可憐な美しさに感動したということになるんでしょうけれど、土地土地によって植物の植生が違う、いろんな植物がある。それが万葉集の中に反映されているという

服部

のは大変すばらしいと思います。万葉集の中に出てくるオキナグサはねこ草だと言うので、「御宇良崎なるねつこ草」、神奈川県三浦半島に生えてるオキナグサ、海岸に生えている、芝と一緒に生えていると詠んでいます。万葉集もさすがにいい加減なやつがあると。海岸にオキナグサなんか出てくるわけがない。オキナグサと言うのは兵庫県でもブナ帯に生えてるわけです。一つぐらいいい加減なものもあつてもいいかなと思つていたので、とんでもないことで、京都の海岸にオキナグサの自生があつたんです。だから、やつぱり万葉集はそんなにいい加減なものではないと再確認しました。それはほつといたしました。私どもの館の庭園にも毎年、オキナグサが出てきました。何かかわいらしい花ですね。

坂本

そうですね。これも絶滅危惧種です。そうですね。そうですか。これは大切にしないといけませんね。是非皆様方

堅香子草の花を攀ち折る歌一首
ものふの (ものふの)
八十娘子らが たくさん乙女たちが
汲みまがふ 入り乱れて水を汲む、
寺井の上の 寺井のほとりに咲く、
堅香子草の花 かたかこの花よ。
(万葉集巻十九・四一四三)



坂本

残念ですね。ムラサキ。カタクリ、これはちょうど私の勤務している高岡市の市の花になっています。カタクリの歌は一首しか出てこないのです。

服部

カタクリはやや寒いところ、照葉樹林の上部の夏緑樹林帯というブナ林の中に出てくることが多いので、高岡なんかはそのゾーンに入ります。

坂本

おそらく大伴家持は奈良の都

に土地の植物を大切にしてくださいたいですね。先生がさつき仰つていたように一株しかないから取ってこなくてはいけないという使命を持った取り方と、「ああきれいなあ、取って帰ろう」というふうに関こそぎ取っていくのと大分違いますからね。先ほどのお話をお伺いしますと、この里山の景観というのは、結構、万葉の景観に似ているところがあるわけですね。

服部

そうですね。落葉樹がずっと広がっているのは、万葉時代の景観そのものじゃないかなという感じがします。

坂本 私どもの話はこちらで終わりたいと思います。どうもありがとうございます。ありがとうございました。



オキナグサ